

群 教 セ	G10 - 01
	平 28. 261 集
	道徳

他者の考えを認め、 自己の考えを追求できる道徳の時間の工夫

— 自分のこととして考え、議論し合える発問を通して —

特別研修員 松島 博昭

I 研究テーマ設定の理由

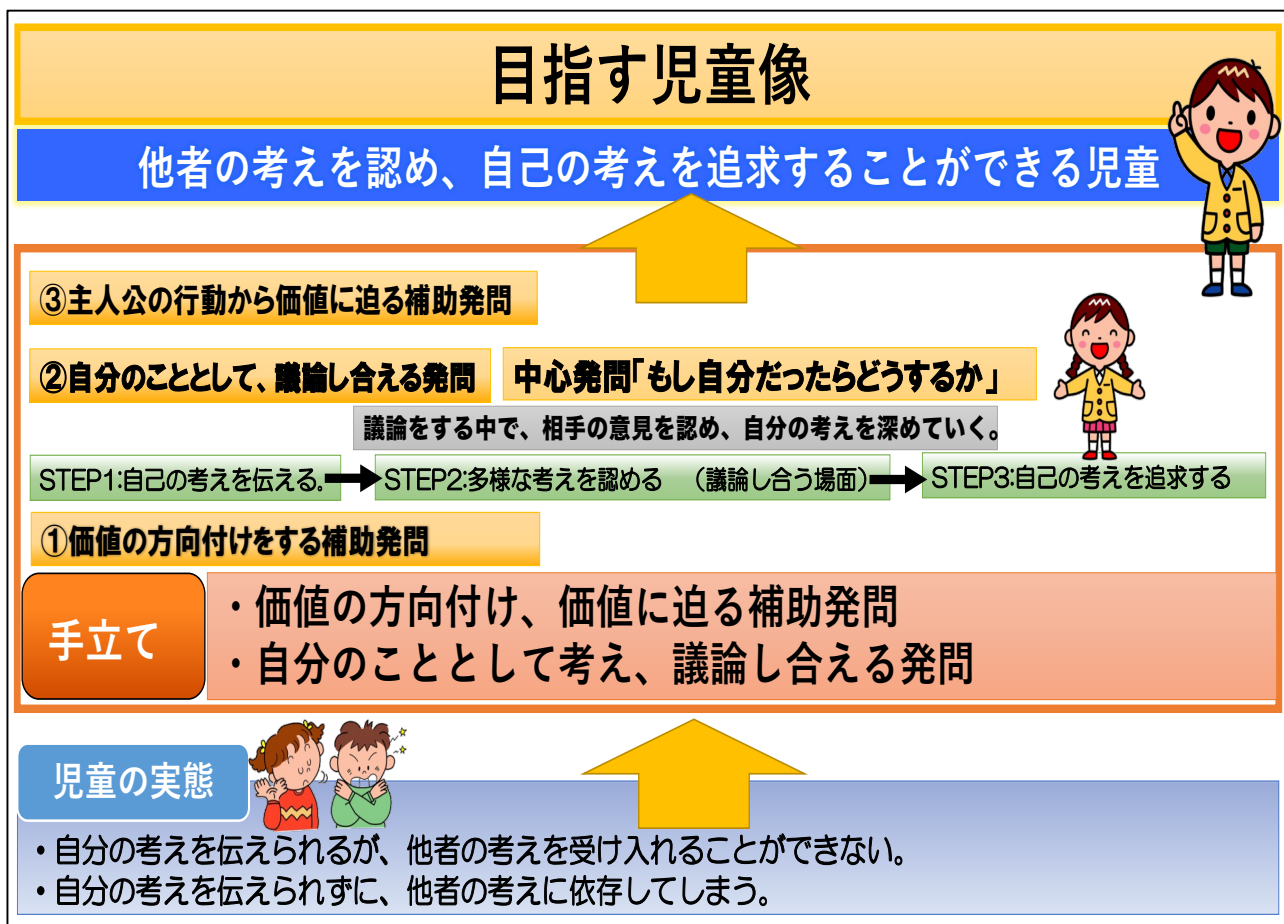
平成 27 年 3 月に文部科学省から道徳教育の抜本的改善・充実の中で「考え、議論する」道徳科への転換により児童生徒の道徳性を育むことがポイントであると示されている。読み物の登場人物の心情理解のみに偏った形式的な指導ではなく、自分のこととして考えられるような指導を行い道徳的心情、道徳的判断力、道徳的実践意欲と態度を育てていくことが必要である。「はばたく群馬の指導プラン」に「中心発問では、児童が自分の感じ方や考え方を多様に引き出せるような発問にすることが大切」とあるように、多様な考えが引き出せるような発問の工夫が必要となる。

本学級の実態として、自分の考えを主張できるが、他者の考えを受け入れることができない。また、自分の考えを主張できずに、他者の考えに依存してしまうということも挙げられる。つまり、自分の意見を主張したり他者の意見を認めたりしながら考えを深めていくことに課題がある。

そこで、児童から多様な考えが出るような、議論し合える発問を工夫することを考えた。多様な考えを出し合い、他者の意見も認め、自己の考えを追求できる児童の育成を目指して本テーマを設定した。

II 研究内容

1 研究構想図



2 授業改善に向けた手立て

自分のこととして考えられるようにするためには、葛藤する場面が必要であると考え。資料（副読本等）の中から主人公が葛藤する場面を抽出する。その際に、主人公の立場ではなく「もし自分だったらどうするか」の発問によって自分のこととして考え意見を発表できるようにする。

また、資料の内容を全て児童に伝えるのではなく、葛藤する場面までを提示する。議論したあとに実際の主人公はどのような行動をとったのかを提示することにより道徳的価値に迫れるようにする。

大きく以下のような三つの流れで道徳の授業をし、目指す児童像に迫れるようにした。

①価値の方向づけをする補助発問

導入の発問によって本時で扱う価値への方向づけができるようにする。

中心発問で葛藤させる場面につながる発問をし、議論をする際に考えを深める一助として活用できるようにする。

②議論「もし自分だったらどうするか」 中心発問

二つの立場で葛藤する場面を設定する。その際に主人公の気持ちでなく、自分のこととして考えられるように「もし自分だったらどうするか」の立場で考えられるようにする。

議論による自己の考えを深める STEP

STEP1: 自己の考えを伝える

- ・自分の立場を明らかにさせるためにノートに自分の立場を書く。
- ・なぜ、その立場なのか理由も書く。

STEP2: 多様な考えを認める（議論し合う場面）

- ・友達の意見を聞きながら分かったこと、気づいたこと、思ったことを付け加えるようにする。
- ・その際に、友達の意見に対する自分の考えを書く。

STEP3: 自己の考えを追求する

- ・議論した後に、友達の考えを踏まえた上での最終的な自分の考えをノートに書き、発表する。

③主人公の行動から価値に迫る補助発問

議論した後に、主人公がとった行動について知らせる。

主人公がなぜそのような行動をしたのかについて考えさせることによりねらいとする価値に迫る。

Ⅲ 研究のまとめ

1 成果

- 二つの心情で葛藤する場面を取り上げ、発問をすることによって多様な考えを引き出すことができ、また、「Aさんの意見を聞いて考えが変わりました」「Bさんの考えに納得しました」など友達の意見を聞いて自分の考えを変えたり深めたりすることができた。
- 「もし自分だったらどうするか」という発問によって自分のこととして考えることができ、全員が意見を持ち発表することができた。

2 課題

- 議論することが目的ではなく、本時のねらいに迫ることができる議論となるようにするために、児童から出された意見を深めるような手立てが必要となる。例えば、児童の意見を種類別に色分けして板書したり、出された一つの意見に対して全員で考える場面を設定したりする必要があると考える。
- 授業の感想や議論した意見をクラスに掲示したり、児童の意見を学級通信で紹介したりするなどして個人からクラス全体の学びに広げる手立てが必要である。

実践例

- 1 主題名 本当の友達 内容項目 2－(3) 信頼・友情 (第4学年・2学期)
資料名 「絵葉書と切手」(出典 学校図書)

2 主題及び本時について

(1) 価値観

本主題は、小学校学習指導要領解説道徳編、第3学年及び第4学年の内容2－(3) 信頼・友情をねらいとしている。

友達に注意したり、忠告したりすることはなかなか難しい。それは、注意や忠告をすることで友達関係にヒビが入るのではないかと考えがちだからである。しかし、真の友情を育むためには、注意や忠告をし合えるほどの信頼関係がなければならない。

集団での活動が盛んになる中学年のこの時期に、健康的な仲間集団を育成していくために、互いに注意し、忠告し合い、それを素直に聞き合える関係をつくるのが大切だと考える。

(2) 児童観

本学級の児童は、友達とより良い関係を気付く友情を深めていきたいと考えている。時には、友達の誤った行動を注意し合うこともある。しかし、その注意が、相手の立場を考えず自己中心的なものとなり喧嘩になってしまうこともある。また、友達の誤った行動に対して、二度と同じ過ちを起こさないように注意するよりも、その非をかばったり、隠したりする行動も見られる。忠告することが相手を怒らせることになりはしないかという恐れや相手をかばおうという気持ちから、忠告ができないでいる。

相手の立場を考えてお互いに意見を主張し、相手の意見を受け入れられる人間関係が構築できるようにしていく必要がある。

(3) 資料観

本資料は、主人公の広子が、仲良しの正子から届いた定形外郵便の料金不足について、本人にそのことを知らせるべきかどうかを迷う話である。「教えるべき」という兄の意見と、「教えない方がいいのではないか」という母の考えとに揺れながらも、広子は教えることを決心する。友達だからこそ、どうすればいいのか思い悩む広子の心情を共感的に捉えさせながら、友達と互いに理解し、信頼し、助け合っていこうとする心情を養うのに適していると考えられる。

3 本時及び具体化した手立てについて

今回の授業では、児童が「伝える」「伝えない」の二つの心情で葛藤する発問をする。そして、それぞれの立場の多様な考えを出し、議論することによって道徳的心情を高められるようにする。

①価値の方向付けの工夫 「注意される時どんな気持ちか」

本教材では、主人公の広子が、親友である正子から手紙の料金不足について伝えるか、伝えないかで葛藤している場面を取り上げる。その際に、友達を注意したりされたりした経験について導入の段階で考えさせる。注意された時にどんな気持ちに自分になるのかを考えさせることにより、議論をする際の「伝えるか」「伝えないか」の自分の意見を深めることにつなげていく。

②議論「もし自分だったらどうするか」中心発問

主発問「もし自分だったら料金不足を伝えるか」「伝えないか」について立場を明らかにさせる。多様な考えを認め合うことにより、価値に迫れるようにする。その際に、友達の意見を認め自分の考えを深めようとしている児童を取り上げ賞賛する。

③主人公の行動から価値に迫る

議論したあとに広子が、正子に伝えたことを提示する。そこで、なぜ広子は伝えたのか知り、友だちとどのように関わっていくことが大切であるのかについて考えさせていく。

4 授業の実際

(1) 価値の方向付けをする補助発問

導入の段階で、本時の価値への方向付けを図るために、これまでの生活の中で友達を注意したり、注意されたりした時の気持ちについて考えさせた。

まず、次の三つの発問をした。

- ・「友だちが、隣で授業中に「おしゃべり」をしています。注意しますか？」
- ・「友だちが、掃除の時間にふざけています。注意しますか？」
- ・「黒板に落書きしたのに、先生に注意をされたら「やっていない」と嘘をついている友だちに「正直に言ったほうがいいよ」と言いますか？」

上記の質問をし、児童に挙手をさせ、確認した。注意する児童の方が多かったが、注意をしないという児童もいた。なぜ、注意するのか？なぜ、しないのか？それぞれの考えがあるが、ここでは触れなかった。そして、次の発問をした。

- ・「注意されるとき、どんな気持ちですか。」

児童からは、大きく2種類の意見が出された。

自分が嫌な気持ちになる派

- ・嫌な気持ち
- ・うるさいな
- ・くそ、何なんだよ
- ・ムカつく
- ・イライラする
- ・わかっているけど、なんか嫌な気持ち

自分が悪かったと反省する派

- ・自分が悪かった
- ・次からは気を付けよう

注意された時に人によって感じ方が違うことを導入で押さえた。

(2) 自分のこととして議論しあえる発問「もし自分だったらどうするか」

STEP1: 自己の考えを伝える

料金不足について「伝えた方が良い」というお兄さんの意見と「伝えない方が良い」というお母さんの意見を聞いた広子さんは、「正子さんに料金不足のことを伝えたと思いますか。伝えなかったと思いますか。」と児童に聞いた。児童の意見は、伝える派が3分の2、伝えない派が3分の1となった。

この段階では、まだ理由を聞かずに、すぐに、中心発問をした。中心発問は、「自分だったら（料金不足のことを）伝えますか。伝えませんか。」である。「自分だったら」を付けると児童の意見は大きく変わり、伝える派が24名、伝えない派が3名となった。予想をしていたよりも伝える派が多いという結果となった。その後、理由をノートに書かせ、少人数での意見交換を行った。

この時に、友だちの意見を聞いて、考えを変えても良いことを伝えた。そして、全体の場での議論を行った（図1）。

まずは、人数の少ない伝えない派から発表させた。理由を発表させると以下のような意見が出された。

(伝えない派の意見)

- ・せっかく手紙を書いたのにそれを言ったら相手が嫌な気持ちになるから。
- ・もう手紙を送ってくれなくなるかもしれないから。

(伝える派の意見)

- ・また、料金不足を払いたくない。
- ・お金を返して欲しい。
- ・また、誰かが払わなくてはいけない。
- ・受け取る人がかわいそう。
- ・自分の心にモヤモヤが残る。
- ・他の人にまた正子さんがやってしまう。
- ・親友が嫌われてしまう。
- ・正子さんが、これから困ることがないように。



図 1 議論の様子

STEP2: 多様な考えを認める

自分の意見を発表させた後、友達の意見に対して自由に意見を発表させた。

議論の様子を以下に示す。

S1：もう手紙を送って欲しくないという意見に反対です。親友なんだからまた送ってくれると思う。

S2：せっかく手紙があるからってというのは相手の気持ちを考えている。

S3：正子さんも教えて欲しいと思うから。

S4：教えたら新しい知識を教えてくれてありがとうって思う。

S5：親友だから間違えていることを伝えて、もし怒っちゃったら謝る手紙を出せば良い。

T：あれ、みんな最初に言っていたけど、注意されたらムカつくんじゃない？

S6：親友なんだからムカつかない。親友だったら注意されても大丈夫。

S7：1年生の時から親友だったら怒ることはない。

S8：親友でも相手に注意したらちょっとは嫌な気持ちになると思う。

STEP3: 自己の考えを追求する

「伝える派」も「伝えない派」も共通している大切なキーワードは、「友達のことを考えているかどうか」であることをおさえた。その後、最終的な意見をノートにまとめた。以下のような意見を児童は書いた。

- ・最初は、伝えないと思っていたけれどみんなの意見を聞いて伝えようと思いました。
 - ・伝えないと言う人の意見を聞いたけれど、やっぱり自分は相手のために伝えようと思いました。なぜなら、大切な友達が後で困ってしまうからです。
- 話し合いを踏まえての考えをノートに書くように指示した。

(3) 主人公の行動から価値に迫る助発問

主人公の行動から道徳的価値に気付かせるために発問「広子さんは、なぜ、正子さんに伝えようと思ったか」をした。児童からは、すぐに、「正子さんなら分かってくれるから」という答えが出た。さらに、「なぜ、分かってくれるのですか？」と発問しキーワードでまとめさせた。

児童からは、「親友だから」「一番の友達だから」「信じあえる友達だから」などの意見が出た。

(4) 児童の授業の感想

- ・これからは、友達に注意された時には、「ありがとう」や「心配してくれてありがとう」という言葉を言っていきたいです。
- ・友達だからこそ教えてあげたいと思った。信頼しあえる友達をつくっていきたい。
- ・友達のことを考えて言葉を言ったり行動したりすることの大切さを学びました。
- ・友達に注意されると「やっちゃったー」としか思っていなかったけど、これからはしっかりと「気を付けよう」と思います。

5 考察

導入で自分が注意された時の気持ちをおさえたことで、その後の議論をする際に児童の考えの一助とすることができた。

二つの立場で葛藤する場面で考えさせることにより、多様な考えが児童から出された。また、中心発問から議論をするまでにプレゼンテーションを使用しテンポよく資料について提示することにより時間の無駄がなくなり、議論の時間を確保することができ、全員が意見を発表することができた。しかし、人数に偏りがある議論となったので、少数派の児童が意見を言いにくくならないような工夫が必要であった。また、伝える派の意見の中にも、「また払いたくない」「お金を返して欲しい」など相手のことを考えていない意見が出された。伝える派の中の意見についても種類に分けて検討する必要があった。

終末で信頼できる友達だから分かってくれるとおさえたあとに、「自分には分かってくれる友達がいますか？」と自分のこととして考えさせる発問があるとさらに考えを深めることができたと考える。

また、授業の感想や議論した意見をクラスに掲示したり、授業で取り上げられなかった意見を学級通信で紹介したりするなどして、個人からクラス全体の学びに広げる手立てが必要であると考えている。